

★私の意見

十周年を迎えた さんちかタウン

森本 泰好

△神戸地下街株式会社常務△



都市の顔は商店街である、という考えが、欧米を歩くたびに、私の頭の中でふくらんでゆく。風格のある都は、必ず堂々とした商店街をもつてゐるし、風情に富んだ商店街のある街は、楽しい雰囲気がただよつていて心地よい。

それにくらべると、日本ではどうも商店街の位置づけが低いようと思う。士農工商という前世紀の尾骨が残っているからだろうか。たしかに駅や役所が街の中心だった時代があった。しかし現代の街は、商店街を軸に人が動いている。だから新しい街づくりを計画する時、付随的に商店街をはりつけるのではなく、むしろ商業施設を核に街づくりを進めた方が、市民生活の実情に適合するのではないか。いずれにしても、都市機構のなかでの商店街の在り方を再評価してほしい。

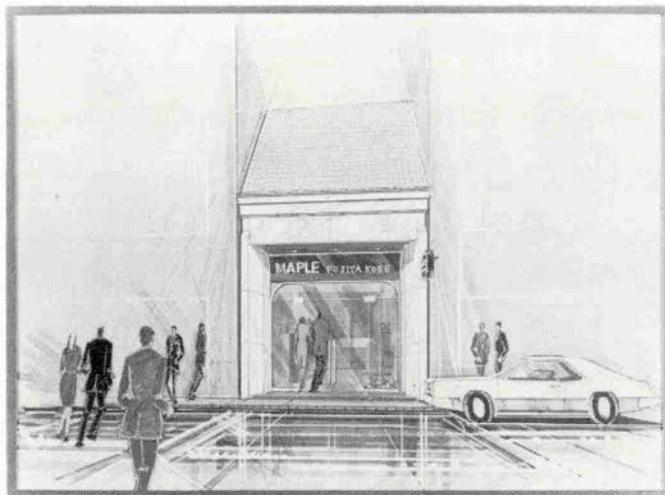
一方、商店街の側も、従来の買い物以外の機能を組合せたコミュニティ施設としての都市機能の一端を担うといふ、自覚が必要となってきた。人と商品との出会い、情報の交換、レジャー、人と人との触れ合い、街のにぎわい／なんとなく人恋しくなった時／商店街をあるいてみようという人を数多くもつてゐる商店街。これから商店街は、なんとはなしに市民がよつてくるような、最終的には地域社会の一員にとけこんでゆく姿勢が絶対に必要であろう。ハンブルクの商店街に、"die Stadt, die uns gebert" という表示があつた。"街、みんなのもの" とでも訳したらよいだろう。

私どもさんちかタウンも、この十月、十周年を迎えて再出発した。十年間に燃えつくしたひとつ生命に、いまた新しい生命を与え直したかったからだ。改装は、ローカリティ（神戸らしさ）とオリジナリティ（専門店らしい個性）の尊重、コミュニティ参加とより安全な地下街、の四つのポイントを、クラシカル・モダンでまとめた。市民の生活文化の充実になにかお役に立ち、ファッション都市こうべのひとつの顔になりたいという、ひそかな願いをこめて。

確かなものだけを求めるあなたのインテリアサロン

メープル FUJIYA 神戸店 9月28日 OPEN

神戸家具のメーカー“不二屋”が新装開店、メープル FUJIYA と名付けました。トアロードで25周年目に当たります。手造りのオリジナル商品と輸入小物を豊富に取揃えたトータルインテリアの店です。大阪店と同様よろしくお願ひ致します



リビングづくりのアドバイザー

メープル FUJIYA

神戸店・神戸市生田区三宮町3丁目5(トアロード)TEL(078)391-0535

大阪店・大阪市北区芝田町55(北阪急ビル)阪急のーる街TEL(06)373-0521

本社・株式会社不二屋

神戸市葺合区旭通1丁目10(不二屋第2ビル)TEL(078)251-8585

隨想三題



<カット・高崎研一郎>

ぶらり散歩

高崎 研一郎

△洋画家・二紀会▽



澄みきった秋空を、アトリエの窓から見たとき、無性に外に出てみたくなった。素足にゴムゾウリをつっかけた。バス通りに出た。ちょうど、駅前からの奥煙行きのバスである。とつさに飛び乗った。今日は太山寺に行つてみよう。沿道の樹々は、すっかり秋の色合いを濃くしている。十分もたつと中山に着き、ほ

とんどの乗客は降りて行く。このあたりの車窓からの景色は人家も少なくなり、紅葉した山々と、黄色に変った田園風情に変つてくる。更に五分ほどで終点 奥畑である。降りる人は私をふくめて三、四人である。

雲一つない青い空に、くつきりと浮んだように、一個の赤い柿の実は、描きとめて置きたい程のすばらしい色合である。

太山寺に抜ける昔からの唯ひとつ細道を行く。玉ねぎ、大根を吊るした一軒の農家をあとに、少し進むと細い道一杯に、でつかい牛が占領している。何物が来たかどうさん臭い目で見ている。幸いに周りが畠なので、ちょっと失礼して通り抜けた。ここでは牛は大きな顔でまかり通っている。何んだか一人苦笑した。露を残した秋

草は可愛いく美しい。ススキが秋の景観をより一層強くしている。山道は急に曲りくねり、よく見分けなければ間違つたところに出てしまう。実際、行きづまつたのを二、三回やつてしまつた。

覆い繁つた木々で青い空もチラツとのぞかす程度である。秋虫の音もいやに大きく聞えてくる。落葉を踏みしめる音が歩を早める。かれこれ一時間余りも歩いたどうか、一層覆い繁つた間を抜けると、ぱっと明るいところに出た。下り坂で眼下に数軒の人家がみえてくる。目前に塔が見えてくる。太山寺である。橋を渡つて道に出た。かつての街道筋であろう。それに相応しく建ち並んだ家々は、私を楽しませた。明石から来たバスが通り過ぎて行つた。数分後、私は太山寺前に着いた。

私は太山寺前に着いた。

幅広い石段の上には重要文化財である。八門もある山門がある。山門を通つて、参道に出る。この道にある土壁が五十石程もある。これが周りの山や田園と調和していく、その行く手に塔の一部を見せる風景は、誰れもが魅せられることだろう。自然美が失なわれていく時だけに、私にはより一層良き風情に思えた。

左に曲ると、一段と幅広い石段がある。登りつめると目の前に大きな伽藍がある。銅板瓦葺の国宝、

本堂である。山氣を漂う本堂の横には丹塗り朱色も鮮やかな三重塔が真青な秋空に建っている。護摩堂その他数多い立派な建造物がある。裏山に登つて七十余りの石仏を見ることも出来た。スケッチ等でいつの間にか二時間近くも経つた。寺を出て明石までバスに行くことにした。座席に深く身を沈めた。なにか充実した気分である。三時間余りの訪れた太山寺を後に、散歩は終つた。

シングアウト

中村　はじめ

△神戸青年合唱団團長▽



にら・レバ
いため

市野木　江充子
△ニット・デザイナー▽



歌唱指導——さあ皆さん、今日も元気よく歌いましょう！と自分で歌い、教えてきて二十余年になってしまった。何百回、何千回とやつてきたことは間違いない。しかし、音楽が社会に満ち満ちているかに見えるこの頃、歌唱指導はシングアウトに変つてきただ。ぼくはこれは前進だと思うのだけど。

どんな新しい歌、リズムに種々

と工夫のあるものでも「一度聞けば……あるいはいきなりに」聞き手は歌い手になり一諸に歌つてしまふ。水上郡垣町の町民センターで毎日曜日集つてある若者のサークル「ヤング広場」でそうだった。全くの耳からの覚えで、ワーッとフィーリングを歌にする感じ。従つてそのリズム感は抜群に良い。ぼくなど音譜をまず頭に描いて歌にする。耳からメロディーが入つても一度は頭の中で視覚化せねば歌にならないのだけど。彼等にその必要は全くない。新しい歌は楽譜からは入らないのだ。従つて彼等の悩みは新しくうたを楽譜で覚えたい時に起つてくる。

樂譜は世界共通のコトバだけど、これを勉強することは外国语をマスターするが如くに困難なもの（？）らしい。外国语となるとぼくなど全く話にならない。一九六八年、久し振りに開かれた世界青年学生平和友好祭に日本の文化代表団の一員で参加した時、ブルガリアの首都ソフィアのある劇場の前でひとりバスを待つて立つてみると、親切な人達からあれこれ問い合わせられ、——英語、仏語、ロシア語と入れ替り話しかけられた！——困つてしまつてアイ・ジャバニーズオーナリーなど、およ青年らしからぬ振舞いで逃げたことがあるのだから……。

PTAコーラスのお母さん達だけではなく、むしろ若い人達のコラスほど楽譜との隔絶が大きくなるようだ。音符をね、少しづつでも読みましよう。判つてたけど、シンドイな。にも関わらず、今日もその歌声は美しくせまい会場にひびく。その精神はシングアウトである。クラシック・ポピュラー・フォーク・歌謡曲・労働歌も歌い、時には太鼓も叩く。それはまさに健康で、多様、多彩である。この公害——口蓋とも——だけはいつまでも残してほしいものである。

力したのだが、多くの質問事項の中に「あなたの好きな食べ物は？」というのがあった。

彼がどんな意図で食べ物のことを開こうとしたのか、またこの質問が全体のどの位のウェイトになるのかは分らなかつたが、社会に関すること、生活環境のこと、デザイン、色彩のことなど質問についてかなりまじめに記入していくと、突然「あなたの好きな食べ物は？」と聞かれて一寸拍子抜けがした。私は食べ物に関して殆んど嫌いなものがない。その日の夕食に食べたものは、にんにくをたっぷり効かしたにらとレバーのいたものであった。何故か私はニヤリとした。これは色といい、形といい、あの匂いといい、およそファッショントの美的感覚とはほど遠い。揶揄的な気持もあって、私はおもしろ半分に「にらとレバーのためのもの」と書いた。ところが、あとでその結果を聞いて驚いた。現在ファッショント業界で第一線で活躍中の経営者、企画宣伝、販売担当、デザイナー、その他この世界で仕事をしている人達の好きな食べ物は、圧倒的ににら・レバ・いためだったのである。思わず抱腹絶倒して大笑いしたあとで、何ともいえない奇妙な感じに襲われた。何事にも興味深々、徹底的に追求して止まない私の性格

が、この因果関係について、その後いつまでも心にひつかつていった。

「好きとか嫌いでなく、あいうものは我々食べるべきだよ」といったのはあるニットメーカーで宣伝企画を担当している二十八才の男性である。彼の言によれば、我々の仕事は、まず企業の中での制約と戦う、時間に追われる、実績によって厳しく評価される、スランプに悩む等々、毎日が肉体と頭脳の酷使労働なのだ。だからビタミンと蛋白質を手っ取り早く取るにはこれが一番いい。彼も又好物なのだろう。色々話を聞いている内に私にも何となく分つてきた。私は二十年來のモーツアルト党である。しかし、一つの仕事を関して確かな実感をもてず、不安定な精神状態が続いている時、モーツアルトを聞くと余計にライラとしてくる。こんな時はむしろ耳をつんざく様なロックのリズムが落着く。そうでなければ「わたし馬鹿よね、お馬鹿さんよね」といつたたぐいの怨歌をふてくされて聞くのがいい。絵画でも同じ事が言えると思う。

何時だったかインドのテンペラ画展を観た。切の迫つた仕事なのに全然する気が起きず、イライラしていた時である。あの気の遠くなるような、超人的な繊細さをが、この因果関係について、その後いつまでも心にひつかつていった。そこで何故か、人間、脳みそ、極致、犯人、帝銀事件といった連想が次々に浮かび、一時間位はいつたのではあるニットメーカーで宣伝企画を担当している二十八才の男性である。彼の言によれば、我々の仕事は、まず企業の中での制約と戦う、時間に追われる、実績によって厳しく評価される、スランプに悩む等々、毎日が肉体と頭脳の酷使労働なのだ。だからビタミンと蛋白質だけのことではないと思う。話をしていて疲れられた時は、口がきけなくなるまで話して疲れさせ。身体が疲れた時は、もっと動いて徹底的に疲れてから休む。中途半端はストレスに通じると思う。頭脳が酷使されいる時は、まず、ロックを書きながら、できるだけ見た目にもグロテスクなにんにく入りにらとレバーワークを食べる。そのためものを食べよう。こうしておけば、ドレスアップして、静かな曲を聞きながら、美しく盛られた料理をおだやかな気分で食べることもできる。そしてこれがファッショント業界に生きる我々の明日への原動力になるのである。何だか急に、にら・レバが食べなくなってきた。思えばしばらく御無沙汰している。

□ある集いその足あと

新書人連合

村上 翠亭

△新書人連合会員▽

いま日本の書道界は、ご多分にもれずいろんなむずかしい問題をかかえています。中でも書人いふばんの権威主義、出世主義的な体質に起因する書壇の退廃は、ほんとうにおそろしいばかりです。

戦後三十年を経てでき上った書壇は、日展を頂点としてみごとに系列化がおこなわれてしまいまして。口に芸術をとなえ、精神性を強調するその反面で、ブームに便乗した悪徳のはんらんは、多少とも書壇の内情を知る人には、絶望をかかえています。

的な嘆きを与えます。
自分たちのかつて所属した書壇を告発したり、暴露したりするのが、決して私たちの趣味でも目的でもありませんが、こうした既成書壇のどろどろとした体制の中を、永年わたって必死の思いで泳いできた過去の無慚さ、無念さを、私たちはこの上なく悲しくはすかしく思っています。

このようなどろ沼から、やっとの思いで脱け出した者たちが期せずして集い、昭和四十八年秋こそ神戸を拠点として「新書人連合」を結成し、純粹に書を追求する作家集団として発足しました。さいわいにして各界の方がたの深い理解と激励を得て、まずは順調に歩んできました。(昭和50年9月現在、会員十一名、会友二十九名)

私たちは、既成書壇のまちがつ

た轍をふまないよう心がけたいと願っています。同志として集まつた会員や会友の間には、もちろん地位や資格に差があるべきではないし、みんなが対等の立場で会が運営されることをモットーにしています。いうまでもなく最もたいせつなことは、各人の個性を尊重し、自由な創作活動の助長に力を尽くすことだと思います。だから「新書人連合風」的な作風や傾向、考え方などが出て来るのを、十分警戒せねばならぬと思っています。時によっては口角アワをとばす討論が必要だし、思想統一などはもっての外、方法論にしても芸術論にしても、メンバーワー間に差があればあるほど私たちは将来大きく成長できるものだと思います。

春にはギャラリーさんさんちかで「燐藻展」さんさんてんを、夏または秋には「新書人連合展」を開催して、私たちの作品と制作の姿勢をみていただることにしています。このたびの第二回新書人連合展(9月9日~14日・兵庫県立近代美術館)では、会員・会友・公募の力作計一五〇点を得て、美術の秋の一翼をになうことができるました。



上 公募作品を審査する会員
下 9月9日~14日第2回新書人連合展
ともに 兵庫県立近代美術館にて

新しいとゆうことはいつまでも古くならないことです。



店舗づくりの
プロフェッショナル
信頼される

KOBE
NIKKEN

(株)神戸日建

神戸市葺合区御幸通3丁目1
PHONE 078(251)3525代

神戸の女は日本一

—性格がまたよろしい—

華房 良輔 ▽コラムニスト▽
え・貝原 六一



センスがよくてプロポーションがよくて美人が多くて、と、今まで神戸の女をほめたたえてきたが、さらに申し添えるならば神戸女の性格のこと——いやア、ここまでいえばベタベタに褒めすぎた感じもするけど。

「お前、神戸の婦人団体協議会かどつかからナンボかもろたんちやうか」

誰かにカングられそうだ。しかし、まぎれもなくそのなだと、ぼくは思う。東男に京女、名古屋男に岐阜女、越前男に加賀女、上州男に越後女、贊岐男に阿波女、なんだかんだといふけれど、神戸女の良さをたたえた言葉はない。それといふのも、神戸女が男性につかえ男につくすという古いタイプの女ではなく、現代的な女性としての性格の良さを持つてゐるからであつて、その意味では現代男に神戸女、となるわけだ。

「神戸は現代美人の産地とおっしゃいますけどねそれだけ容姿端麗であるにもかかわらず、神戸出身の女優サンやモデルいうのは少ないよオ」と、大阪の女がひがんで申された。くわしくは知らな

いけれど、寿美花代、扇千景あるいは由美かおるとか、すばらしい女優さんが神戸あたりから出てゐる。しかし、大都会出身タレントの比率からいえば非常に少ない。お隣りに宝塚歌劇团もあるといふのに。ちょいと考えれば神戸の女、みんなみんな女優サンになつてもよさそうに思うのであります。(三枚目も少しほまじつて)

これ、神戸女性の性格がいい所以。

あまり大きな声でいえないことだが、女優とかモデルにあこがれるのは、鼻もちならない自己顕示欲のかたまりが多くて、小さいときから「きれい」とか「かわいい」とかいわれて育つたために必然的に、自分が特別の存在であると思うようになる。この自惚れに輪がかかる、たえず他人から賞賛されていないとおさまりがつかなくなるのだ。もっとも、このような見栄つぱりでないと、特に才能のない奴は、女優稼業なんてつとまるものもあるまいが。

ところが、神戸はなにしろ容姿端麗がワンサンいる。美人は特別の存在でもない。だから誰も「

きれい」とか「かわいい」とかおだててくれなかつた。したがつて自己顯示欲望女優が誕生しないのである。アカヌケ美人が多いのに女優やモデルが少ないというのは、とりもなおさず神戸女の性格がすなおであることになる。冷静に自分を見つめることができる。いまふうにいえば、つっぱらなくともしあわせな生き方というのを会得しているということ。そういうえば、神戸女はヒスティリ的性の人が少ないようだ。ぼくの知つてゐる限りにおいては。

神戸女は見栄をはつて生きる必要もなければ、

男に媚びへつらつて生きることも望まない。

女優は少なくとも、昔から技術をもつた女性の多い土地柄だ。美術、音楽、文学等で活躍する女性も多い。これは近代的な都市として早くから磨きがかかるからである。日本の都会人の中でもつとも洗練されているのが神戸っ子。都市に住む市民の性格は、流動比率によつてその色合いが決められる。東京、大阪、名古屋、そのほかの都會のほとんどは、全国またはその近くの地方から集つた地方人の集積地である。土地っ子が都會人として洗練される前に、集つた地方人の混濁したカラーに染められてしまうのだ。

京都だけは、かたくなに王城の地のプライドに固執してきた。しかし、ほとんど産業の基盤をもつたない京都人は、義理と見栄で生きるのをよしとし、いまだに近代的都會人へ脱皮できないでいる。神戸となれば近年まで京都とおなじく、人口流入が少く、外国居留人と共に獨得のカラーを作りあげてきた。昨今、ベッドタウン的様相ももち、他府県からの移入も多いけれど、朱にまじわつてあとから神戸に来た人も赤くなり、古いモラルを捨て、開放的な神戸人の性格に染まつていく。

神戸女は近代的都會人として訓練を受けているから、やはり他の土地では見られぬ氣質がある。他人のことをこせこせと穿鑿しないし、陰口もあまりいわぬ。一見のんびりしているようでシンはしっかりしている。お世辞をいわぬ。行動的である。さほど過去にこだわらぬ。感情を殺さない表情がゆたか。男性とのあいだに特別の垣やミゾを作ろうとしない。茶目ッケがある。E、T、C……。

神戸は長い伝統を誇る生協をはじめ、消費者運動や市民運動が盛んである。そしてこれらは、女性が主体となつてゐるところが多い。神戸の女性の意識の高さを示す一端である。そのくせ、奇妙なウーマン・リブの運動は活発でない。神戸女は、男にケンカを売らなくとも、自分で自分を解放する道を歩むすべを知つてゐるからであろう。

その意味では、神戸の女は古い男たちからは好みないかもしだれぬ。男のキゲンをとつて、ヘイコラヘイコラかしづくタイプではないからだ。妾には不向きである。友達によし、恋人によし、そしてこれから時代を生きていいく女房には最適でもうひとつ、色恋抜きの仕事の相棒にも神戸女はよろしい。

「そうですが、神戸の女がコセコセせんのは、都會やのに空間が拡がつてゐる、この立地条件のせいやないですかな」

と、神戸の友人がいった。ぼくは、都市 자체が古い因習を持たないせいだと思う。京都の女は男に媚びようどし、大阪の女は要領よく男を手玉にとろうと考え、神戸の女は男と仲良くやるうとしている。そやから、ぼくも、神戸の女とは特別に仲良うなる、と思つてます。仲良うしたい女、この指たしかれ。

さしまざしまな作品

河口 龍夫 △造形作家△

一九七三年九月十五日から十月二十一日迄、第八回パリ・ビエンナーレが開催された。

オープニングの日、ヨーロッパ各国のアーティストや批評家、画商、ジャーナリスト、美術関係者や文化人など多くの人々が見にきた。

すべての作家達が自分の作品の反応を気にしていたようだ。若いアーティストにとって、この国際展は一つの試練かもしれないが、発表の良き機会であることには相違ないのである。したがって、それぞれがその時点でのベストの作品を用意したにちがいないのだ。

さて、展覧会の印象であるが、その印象を簡単にある一つの傾向として語ることは大変困難に思われた。そこにはあらゆる種類の関心からのアプローチがあり、さまざまの材質と方法と観念がうずまいていたからだ。それらを包含した新しいイズムとしての芸術の主張は見られなかつた。むしろ、個人個人が自分のみつけた観念なり方法で、世界について語りかけようとしているがごときに見えた。

展覧会の全貌をこの紙面に書きつくすことはできないが、様々な作品のなかから幾つかを見てみよう。例えば、一室に砂利をしきつめ、本物の墓

場そつくりに幾つかの墓石を模造し並べたドイツの女性作家の作品。アーティストがある特定の所に旅行し（この場合何故か日本の佐渡ヶ島）その場所で得た石、鳥の骨、おふだ、昆虫や小動物の死骸等を採集し、場所と日付を記入した個人的コレクションとして、ただ陳列ケースに整然と配列した作品。美術館外の水のないプールに、枕木を多数配列し、所々にペーストをぬつた作品。市立美術館とパリ国立近代美術館の屋根から屋根にゴムを渡した作品。広い壁面一杯に水ばかりした紙に全面スミをぬつた作品。古代のある都市を様々な資料とともに、もし現在も残つていたならこのようになつっていたのではないかという想定のもとに、廃虚の古都を模型で作つた壮大なロマンの作品。うす暗い部屋の床に白い大きな円がえがかれ、その内と外で人間そつくりのリアルな等身大の人形が、仮面をつけて、まるでストップモーションの写真のように凍結した状況の作品。白い紙の上にランダムに打たれた点の一つ一つを別の紙に一つの点を数十倍に拡大した作品。地図をトレースし、そのトレースした地図をトレースしそのくり返しの作業による作品。人体にくわえる拷問の装置そのものを作品として作り、みずからこそ

ろみた写真と合わせて展示した作品。一千年ほど前のカヌーをそつくりそのまま、丸木に一木彫りで模刻した作品。人体の各部分を忠実に作り、肉屋よろしく売っている状態を作品として立体的に作り、食糧問題をアイロニカルにあつかった作品。三人のグループがマイキャップをして、毎日会場に座り、ある静止した人間の状態を、演劇ともハブニングともつかない不思議な空間を演出した作品。デュッセルドルフ・シーンと銘打った、デュッセルドルフのアーティスト達による実に虚無的な作品の数々。ヴィデオによるイベントの作品。絵画や立体造形の基本構造となる様々なエレメントを実験し、その実験の結果を配列した、フランスのニースのグループ作品。絵画の復権を願うがごとき、バーネット・ニューマンを思わせるような、事実彼等は、みずからマチスの孫であり、ニューマンの息子でありたいと自称している。平面性を強調した絵画作品。ヒモを使った原始の文字を思わせるような全てのヒモの結び目の

可能性を試みた作品。等々語り出せばきりがないのであるが、ここに羅列しただけでも作品の多様性は想像していただけると思う。

一方、観客の反応であるが、私には素直で直接的に思われた。私が私の作品の会場に居合わせた時、それらの作品を見、ネームカードを見て東洋人である私に、貴方がこの作品の作者ですかと聞き、そうだと答えると、素晴らしい作品だと誉め握手を求め色々な関心を話しかけてきた。多少御世辞まじりとは思うが、そんなことが何度かあるとうれしくなった。又別の機会に美術館の玄関にハリガネによる無限状の空間を作った作品を指し、その作品を含めて、このビエンナーレ全体を痛烈に批判する演説をしているのに当った。その若者の言うのには、ブールデルのような作品が正当的な作品であって、パリ・ビエンナーレのような作品は実に嘆かわしいと言い続けているのであった。

古いとか新しいとかが唯たんに図式的にあるのではなく、一見古いと見える伝統的な考えの中で生きている人達がいるのをさまざまと見せられた思いがした。展覧会がたんに作品を見る場でなく当然のことながら、作品を前にしてのアーティストと観客の、アーティストとアーティストの、観客と観客のコミュニケーションの場になることをあらためて感じた。

△終▽



多种多様な作品が発表されたパリ・ビエンナーレカタログより

筆者の河口龍夫氏は文化庁海外研修員として十一月中旬から一年間、ヨーロッパ、アメリカへと旅立たれることになりました。第八回パリビエンナーレのもうようを綴ったこのレポートは今回で終了です。一年間ご愛読ありがとうございました。また帰国後のレポートをお楽しみに。